弘学時報

第 63 号
（年４回発行）
編集発行
弘前学院大学
広報委員会
印刷所
㈲小野印刷所

二〇一五（平成27）年度　卒業式式辞

「謙虚と言葉」

学長　吉岡　利忠

本日、二〇一五（平成27）年度の文学部42回生、社会福祉学部14回生、看護学部８回生ならびに大学院社会福祉学研究科修士課程12回生、大学院文学研究科修士課程10回生の学位記授与式を挙行するにあたり、弘前学院理事長・学院長であります阿保邦弘先生はじめご来賓の方々、卒業生・修了生のご家族の皆様、校友会、父母と教職員の会、理事会、評議員会そして教職員各位のご臨席を賜り誠にありがとうございました。

ここに総勢１３８名の皆さまが弘前学院大学から卒業・修了して行きます。誠におめでとうございます。この中には県外からお出でになった社会福祉学研究科の１名も含まれ、大学院の授業のみならず修士論文作成に多くの時間を費やし、主査、副査の先生方から高い評価を頂いております。この度、大学を卒業する皆さんも、それ以上の知識や技能を学ぶ必要に迫られた時には大学院への門を叩いて下さい。

先ず、誇れることでありますが、本学卒業生の就職率はほぼ100％でここ数年推移しております。地元に根付いた大学としてこの地域へ就職する卒業生が少なくありません。就職に関してはご来賓の皆様のお力添えもあり感謝申し上げたいと存じます。卒業生の皆さまには今後さまざまな分野での活躍が期待されており、嬉しい限りでございます。

さて、皆さまに私が大切にしている銘をご紹介したいと思います。それは「謙虚と言葉」、個人的なことではありますが私が指導を受けた阿部正和先生が色紙に揮ごうされたものです。常に私の目に付く学長室の棚に置いてあります。先生は東京慈恵会医科大学内科学の教授で、その後、理事長・学長になられましたが、つい最近、97歳でお亡くなりになりました。阿部先生のお父様は弘前市出身の阿部義宗先生で、弘前学院理事長を一九四〇（昭和15）年から２年間さらに一九五七（昭和32）年から16年間の長きにわたって２回お勤めになられました。阿部正和先生の伯父は本学創立者であります本多庸一先生です。弟さんは阿部志郎先生で横須賀基督教社会館館長そして神奈川県立保健福祉大学学長に就任された方です。本学の創立礼拝で数回説教をされましたし、元寺町の日本キリスト教団弘前教会でも数回お話をしております。阿部志郎先生のお話には感動する場面が多く皆さんも創立礼拝に出席したと思いますが先生のお話は心に残っているのではないでしょうか。個人的なことまで含め申し上げましたが私が本学に就任したのも阿部先生らのお導きがあってこそだと思っております。

さて、「謙虚と言葉」ですが、謙虚とは自分の能力・才能などを誇らず素直な態度で人に接するさま、相手を重んじ、ひかえめなさま、と表現できますが、大学４年間、大学院２年間でさまざまな分野の学業を修めました教員・職員そして学生同士のコミュニケーションや事務的な関わり合いを通して一人前の人間としてはいまだ十分ではないにしろ磨きあげてきて今日に至っております。これまでは大学という限られた環境の中で与えられたことを学び試験に合格すればよかったのですが、これから社会にでるということは経済的にも精神的にも自立するということです。大学で得たことを基盤としてさらに能力・才能に上乗せして頂きたいのです。その時こそ本物の謙虚さを身に付けることができるというものです。先輩や仕事上のお客さまはもちろんのこと同僚とのコミュニケーションや対応には誇らずに素直な態度をもってあたることが必要です。社会に出て経験を積めば積むほど力をつければつけるほど、努めて謙虚さを保つ必要があります。そしてもう一つ、「言葉」、謙虚さがあってこそ、言葉だと思いますが、言葉にはおのずと謙虚さが表れるようになります。相手の話をじっくり聞いてそれを受容しそして対応・返答する、極めて重みのある情景です。皆さんはこれからさまざまな人たちと会いいろいろな場面に立ち合います。そしていかに対応するかいかに返答するか、その時にこそ「謙虚と言葉」を思い出してください。

また、時間の使い方や相手と約束すること、何か要請されたら可能な限り早めに行動に移すということも重要なことです。また、阿部先生からは常に葉書数枚を持ち歩きなさいとも言われました。何か指導して頂いたり貴重な情報などを頂いたら何処にいてもすぐにお礼の返事を出しなさいと。昨今は、携帯メール、ｐｃでの連絡で済まされることが多いでしょうが、一筆書くことはそれなりの重みがあります。どうぞ、お気に止めて下さい。

さて、近年の私たちを取り巻く環境は激変し極めて複雑になりました。その中で心身の健康を維持していかなければなりません。職場は学校生活を終えた人たちがその後の人生を過ごすもっとも長い生活期間となります。職場では働くことによって自分を含めた家族の安定した生活の基盤をもたらすこと、職場での役割の充実感、職場における複雑な人間関係がありますが、どうぞ自信を持って世の中に飛び立って下さい。

さて、学校法人弘前学院は創立一三〇年目に入りました。今年の10月10日には一三〇周年記念式典が予定されております。皆さんは本学の歴史と伝統のある大学に在学したことに、堂々たる誇りを持って欲しいと思います。

最後になりましたが、将来、皆さんが素晴らしい伴侶を得て、行く行くは皆さんのお子様たちが弘前学院聖愛中学校・高等学校そして母校となる弘前学院大学を目指していただき、弘前学院の歴史を共に作っていただきたいものです。そのような、皆さんに愛される大学になるように私ども教職員は一丸となって素晴らしい教育環境、研究環境、運営環境を形作って行きます。以上、皆さんの前途を祝し、私の式辞といたします。皆さまにそして全ての大学関係者に神の思し召しを。

God Bless You.

本多庸一とキリスト教㉟

学校法人弘前学院
理事長・学院長　阿保　邦弘

第五回西部年会

一九一二（明治四五）年三月八日　本多六三歳　第五回西部年会のため長崎へ出発　夫人ていい子同伴　八時半新橋から京都へ　午後七時半京都着

三月九日　井深梶之助と京都見物　午後二時　教役者会　午後七時教会同盟成立発表演説会で演説

三月一〇日　朝一〇時　組合教会で礼拝説教　会食　知人訪問不在　午後四時宿に帰る「悪寒を覚え疲労を感ずる」午後六時四〇分中央メソジスト教会で説教

三月十一日　七時三〇分　広島行き汽車に乗る　午後二時五分岡山着　宿は自由舎　三時組合教会の教役者会に出席　七時メソジスト講義所説教　十時帰宿

三月十二日　夫人と別れ一人神戸に戻り、南メソジスト派の宣教師ターナーの葬儀に出る「疲労して顔色も悪し」　夜行列車で広島に帰る

三月十三日　夫人と落ち合う「今日非常に寒し、悪寒にて甚だ不快なりと書いている、この頃既に発病していたのではないか」　夜十時十五分長崎着　平戸町池田屋に投宿「体温の高きを覚ゆ」と記している

三月十四日　西部年会第一日　午後二時教職会　午後六時発熱、吐気あり　夜の教職会を休む　医師の診察投薬　熱三十八度九分

三月十五日　午前十時　医師の制止を聞かず　年会を召集成　立させた　午後一時教役者会を休む　午後四時の教役者会は出席　九時部長会を池田屋の自室に招集

三月十六日　九時半　会議出席　午後自室で部長会開催　七時伝道局委員会「高熱を圧して連夜の会議　病悪化」

三月十七日　按主礼のための説教　鎮西学院の卒業説教を中止　午後二時重体をおして十三人の教師に按主礼を施す（按主礼　正教師資格を与える儀式を言う　按主を受けた教師だけが牧師になれる）この時発熱三十九度　声はかすれ手は震えていた　三時から故笹森宇一郎と故ターナーの追悼会に列席

三月十八日　容態急激に悪化　熱三十九度八分　西部年会終了

東部年会・終焉

東部年会　静岡で開催　静岡部会長波多野伝四郎に「熱が高く旅は無理である　適宜に議長を選び会を進めてほしい　もし快方に向かえば　静岡で入院して相談に乗ることができるかもしれません　しかし　これは夢であろう　皆さんによろしく主の祝福を祈る」というものであった。

三月十九日　熱三十九度

三月二〇日、二十一日　熱三十九度を切るが、衰弱

三月二十三日　浦上の県立病院入院

三月二十四日　熱　三十八度一八度五分　出血六回　しばしばうわ言　危篤　夜になって小康

三月二十六日　黎明から昏睡状態　午前十時三十分　臨終

明治四十五年三月二十八日　国民新聞の「東京便り」で徳富蘇峯は次のように報じている。「本多庸一君の長逝は東北をしてその一人物を喪わしめ、基督教をしてその一元老を少からしめたり。而して日本国民の立場より見るも一損失たるを免れず、これ真に惜しみても余あり」。

三月二十九日　長崎銀屋町中央教会で決別式

三月三十日　長崎中央会堂　日本メソジスト教会公葬

四月一日　遺骨東京へ　途中沿線各駅には教会関係者や青山学院校友がこれを迎送した

四月六日　青山学院講堂　本葬儀

日本メソジスト教会、青山学院、基督教青年会、メソジスト宣教師団四者合同葬

会葬者　二千人　キリスト教界の指導者、青山学院関係者、仏教・神道関係者、教育界、政界、財界、官界の知名人を網羅し、故人生前の幅広い活動の境域を物語っていた

葬儀説教は横浜時代以来の同志井深梶之助によっておこなわれた。井深は、本多の生涯と死は、日本基督教が定着するための「人柱」であったとして、次のように述べた。

「君が西部年会に於て病を押して有為の青年伝道者に按主礼を施し、病床にて激務を執り、ついに斃れたのは実に職に殉じたのでありまして、愛国の士が国のために一命を捨てるのと毫も変わらないのであります。」

明治期の日本キリスト教界に独特な地歩を占め、幅広く多彩な活動によってこれを指導した「巨大なる影」はかくして消えたのであった。

本多の墓は多磨霊園にある。また郷里弘前市新寺町の本行寺にある本多家代々の墓地に葬られている。

（以下次号）

研究紹介㉜

高齢者の味覚に関する研究

看護学部　助教　小野　綾

私の専門は老年看護学領域であり、現在、高齢者の味覚に関する研究を行っている。味覚には基本５味と言われる塩味、甘味、酸味、苦味、旨味がある。生物学的視点で塩味、甘味、旨味は潜在的に栄養があって有益なものとして、酸味と苦味は腐敗したものや潜在的に毒が含まれているものとして見分ける。つまり、味覚は生きていくために必要な感覚である。

さらに、人間における味覚とは他の面も持っている。食文化が発達し、人間にとって「食べる」という行為は単なる栄養摂取だけではなく、それ自体が楽しみとなっている。また、本来は生物学的アラームである酸味や苦味が嗜好の対象にもなっている。

味覚が加齢により影響を受けることは広く知られている。高齢者を対象とした食に関するこれまでの国内外での研究では、高齢者の食欲不振や食事摂取種目数の減少や味覚障害と死亡率との強い関連が報告されている。高齢者における味覚の実態を明確にすることは、高齢者の栄養状態の改善や健康寿命の延長を図るために有益な情報をもたらすことができる。

個人が「味をどれくらい感じているか」の客観的評価は難しい。人が「とても甘い」あるいは「味が薄い」と感じる事は主観的な事象である。つまり、個人の中で感じ取られている味覚を他者が知ろうとする場合、主観的情報が客観的情報に変換されることとなる。刺激と感覚の関係を科学的に扱う分野として心理物理学がある。１８６０年、ドイツの物理学者Fechner GT は心的事象の測定手法を世の中に示した。Fechner の研究は、現在でも人の心的事象を研究するための中核となっている。心理物理学的に味覚の加齢変化を調べた研究は多くあるが、内的事象をデータ化する際の課題や味覚以外の複雑な加齢変化による問題などがある。心理物理学的アプローチだけではなく、神経生理学的手法や形態組織学的手法によっても味覚の加齢変化について研究が行われてきている。これまでの数々の研究報告にはまだ一致していないものもあり、味覚の加齢変化についてはまだ今後明らかにしていくべき事が多くあると考える。

加齢による味覚低下を遅らせることは可能なのか、味覚が低下した高齢者に対しどのような援助ができるのか。そこへの答えに結びつくことが出来るよう、人がより豊かな食生活を送ることができるよう、そして日本での健康寿命延長につなげていくことが出来るよう研究に力を注ぐつもりである。

談話室

目の前で、突然、人が倒れたらどうしますか

看護学部　講師　幸山　靖子

駅や空港、学校などで自動体外式除細動器（AED：automated external defibrillator）を見かけたことはありませんか。ＡＥＤとは、様々な原因で心臓が痙攣を起こしている傷病者の心電図を測定・解析を行い、必要に応じて電気ショックを与え、血液を送り出すための正常なリズムに戻す医療機器です。本学には、１号館と６号館に設置されています。

平成16年、厚生労働省による「非医療従事者によるＡＥＤの使用のあり方検討会」報告書により非医療従事者によるＡＥＤの使用が認められました。翌年には一次救命処置（BLS：basic life support）法が改定され、日本版心肺蘇生に関わる新しいガイドライン「日本版２００５年ガイドライン」が策定され、ＢＬＳ手順が簡略化され、救助者がより簡単に心肺蘇生法を行うことが出来るようになりました。ガイドラインは５年毎に見直しが行われ、昨年新しいガイドラインが発表されています。総務省消防庁によると、平成25年における一般市民により心肺蘇生が実施された傷病者は51・１％、その１ヵ月後生存率は14・８％で、実施されなかった場合と比較して約１・６倍高くなっています。また、一般市民によりＡＥＤを使用した除細動が実施された傷病者は３・６％、１ヵ月後生存率は50・２％で実施されなかった場合と比較して約５・６倍高いと報告されています。このことは、初期対応の重要性を示していると考えられます。

看護学部に入学する学生の半数は、高校や自動車教習所等で心肺蘇生法やＡＥＤ等の講習を受けています。これは、12年前に非医療従事者がＡＥＤを使用できるようになってからの普及・啓蒙の成果だと言えます。現在では、人口あたりのＡＥＤの設置数は世界一となりましたが、毎年約７万人の方が心臓突然死で亡くなられていることを考えると、ＡＥＤが有効に活用され、多くの命が救われているとは言えません。倒れている人をみたら、肩をたたきながら声をかけ、反応がなかったら、大声で助けを求め、１１９番通報とＡＥＤ搬送を依頼してください。あなたがそこにいて、気持ちを奮い立たせることで、助かる命があります。

著書紹介

『最高の弘前の見つけ方』

文学部　講師　生島　美和

佐藤和博（アメリカ文学）、本郷亮（経済学、２０１２年３月まで社会福祉学部講師）、藤岡真之（社会学）と筆者（教育学）。なんとも異色な組み合わせだと思われよう。しかしこの４人は、大学教員としての教育・研究活動ではなかなか味わうことのない苦悩の経験を共有している。それは２００７年からおよそ２年ずつ、４週から６週に一度「陸奥新報」の「日曜随想」欄（４面）にエッセイを寄稿してきたこと。冒頭の順に執筆のバトンを渡してきた。「テーマは自由」という拘束のもとのネタ探し、刻々と迫りくる締切り、穴をあけられない緊張…出版に向けた編集会議が毎回非常に創造的で和やかに進んだのは、それを切り抜けた達成感と解放感があったからかもしれない。

寄稿してきた原稿は既にある。しかし書籍化には更にかなりの作業と議論を要した。特に本のタイトル。当初、この執筆者の個性に楽器を重ね『日曜朝の四重奏』が冠されていた。しかし初稿校正の時、販売や話題性を考慮するならば「津軽／弘前」が入ったほうがいいと再考された。決まったタイトルは、映画「最高の人生の見つけ方」のリズムを彷彿とさせる。

この度刊行に至った本書には、２００７年12月から２０１６年２月までに掲載されたエッセイと書き下ろしもの83本を収録した。このかんには東北新幹線の延伸、東日本大震災、消費税の増税などがあり、私たちの社会生活や価値観に変化をもたらしている。それぞれのエッセイは、弘前に身を置きながらそうした時勢を背景に思索を巡らせた足跡であり、執筆した教員の、授業や論文で見ることのできない哲学や人柄、クセがにじみ出ている。開学１３０周年記念イヤーの始まりに、弘前学院出版会から出版助成を頂き学部や専門を超えてつながった４人の「余技」をご一読いただけたら幸いである。これを読んで各教員の講義を聞けば、内容も頭に入りやすいかもしれない。

『最高の弘前の見つけ方』（弘前学院出版会、１，２００円（税別））は県内主要書店、北方新社ＨＰ、本学へのお問合せなどでご購入いただけます。

文京地区社会福祉協議会「住民福祉座談会」を通して

社会福祉学部　助教　丸山　龍太

過日、３月５日に本学礼拝堂で開かれた「住民福祉座談会」では、１５０名近くの参加者があったとのことで、正直驚くばかりである。元々この会に私が携わることとなったきっかけは、「住民福祉座談会」の打ち合わせの席に同席させて頂いた際、地区の民生委員から寄せられた一言であった。「対応に困っている」と。伺うと認知症高齢者の対応方法に苦慮している。その具体的な事例が「お風呂に入りたがらない」「デイサービスに行きたがらない」「モノをなくしたと言う」「同じことを何度も話す」の４点であった。どういう対応をすれば良いかを座談会で分かりやすくお話し頂けないかという話であったと記憶している。

さて、依頼されたは良いものの、分かりやすくというのはなかなかの難題。そこで「寸劇」という案が浮上した。良い例、悪い例を交互にお見せすることで分かりやすくなるということであった。その場で私は「それ、良いですね」と言ってしまったのが、運の尽き。これをきっかけにとんとん拍子で話が進み、いつの間にか私が寸劇の脚本兼稽古指導を仰せつかってしまった。

ただ、せっかくの機会である。「あたって砕けろ」の想いでと稽古していくと、これがなかなか面白い。社会福祉学科長の石田先生が、過去に舞台稽古の指導をされたとのことで、そのノウハウを学ぶことも新鮮であったし、稽古中次々とその場でセリフが追加され、生きた台本へと変わる瞬間もその場で目にした。

写真は、陸奥新報２０１６年３月６日付に掲載されたものであるが、協力してくれた学生には「お見事！」とここで評したい。当日のギリギリまでセリフ合わせに苦慮し、「本番で大丈夫か」と一抹の不安を感じたのであるが、「本番」ではその不安は一瞬で消え去ってしまった。セリフは完璧、アドリブも加わり会場を沸かせ、最後には拍手の嵐である。学生の持つ力を改めて実感する貴重な経験であった。

（写真提供：陸奥新報社）

青森県の主要都市（市区部）では、普通救命講習が開催されています。また、昨年から９月９日の「救急の日」を含む１週間を「救急医療週間」として救急法の普及・啓発を目的に心肺蘇生法やＡＥＤの講習会が開催されています。受講してみませんか。

弘前学院校友会より母校援助金寄贈される

去る、２月26日（金）に、弘前学院校友会中田悦子会長より２０１５年度の母校援助金30万円が寄贈されました。この援助金は毎年寄贈され、今年は、６号館中講義室２の天井吊り下げ型プロジェクター購入資金として使用されます。日頃の講義や講演会などで活用されます。卒業生の皆様方の熱い援助に心から感謝申し上げます。

若者に、煙のない社会を

看護学部　准教授　工藤千賀子

♪ 元気　長生き
NO SMOKING ♪

二〇一六年三月一日（火）市内スペースデネガにおいて、「若者（学生）のための喫煙防止普及ストリートダンスと座談会」が開催された。今年度六月からの「喫煙対策からはじめる若者「健やか力」向上事業」の健康度意識調査検討委員会の委員として出席した。

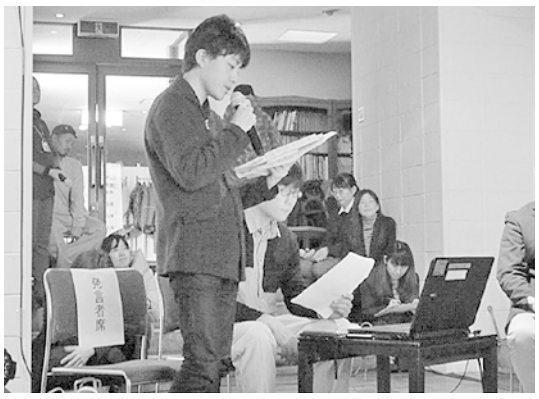
学生の検討委員である本学の社会福祉学部学生二名が、調査結果の報告をした。調査対象は、中南地域県民局管内の大学・短大六校の三〇八五名で、そのうち二四二七名の集計結果であった。喫煙経験者11・7％のうち現在喫煙者は3・8％と、平成二十年度の前回調査の21・5％に比べ減少していた。喫煙を開始した時期が大学生であるという回答が約六割であり、前回調査に比べ二倍以上であった。喫煙のきっかけは、友人に勧められて、何となくという結果であった。

よく耳にする「生活習慣病」、若者にとっては、今、何の症状も出ていないがゆえ、関心がなかなか向きにくい。しかし、〝おやっ〟と思う症状を自覚した時には、「あの時こうしておけば良かった。こんなことしなければよかった」と後悔することになる。特に、たばこは自分が吸っていなくても、煙にさらされる『受動喫煙』という問題を持つ。そのため、たばこの煙から若者を守る無煙社会を目指して行われた事業だった。

その結果の公表の仕方が、〝目からウロコ〟〝びっくりポン！〟だった。ファンキースタジアム？　ストリートダンス？　…なして？　なに？　そう思い出席したが、帰路につくときには、感動!!だった。正しいことの伝え方。そこに新たな発想と仕掛けがあった。津軽弁が〝まじゃった〟ラップと子どもから大人までのダンスで、喫煙防止を訴えている。

♪未成年　喫煙
まーね　まーね♪♪
辞めりゃ　あなたも　今日から
ジェンコもぢー♪

弘前から発信された喫煙防止の新たなツール。YouTubeで見て聞いて、いいね！　しよう、そして吸っている人に辞めることを勧めて、みんなで無煙社会をめざしませんか。



社会福祉学部立花研究室『障害者スポーツに挑戦してみませんか!?』

社会福祉学部　講師　立花　茂樹

社会福祉学部の専門演習Ⅰ（三年生対象）を受講した立花研究室所属の学生たちが、一年間の学修のまとめとして、リーフレット「スポーツしよう！障害者スポーツの扉を開いてみませんか」（写真）を作成した。

専門演習は、学部所属の専任教員の指導を受けながら、学生自身の関心ある分野について、実践の客観化・科学化・法則化する能力を身につけることを目標とする社会福祉専門専攻科目の一つ。

今年、立花研究室では、「障害者スポーツ」をテーマに、障害者にとってのスポーツの意義、障害者スポーツの歴史と現状・課題、主な障害者スポーツの種目とその体験などに取り組んできた。

作成したリーフレットは、青森市にある青森県身体障害者福祉センターねむのき会館をはじめ、中南津軽地域の役所や福祉協議会の障害福祉担当窓口や、障害者スポーツの関連施設に置いてもらうこととし、学生たちが手分けして届けた。

学生たちは、学修を振り返って、今回のリーフレット作成が、多くの人の目に触れ、障害者スポーツ、高齢者スポーツに関心を寄せるきっかけになってほしいと話している。

《開放講義を受講して》

差別問題の解決の難しさ

受講者　佐藤　和成（ペンネーム）

前期の政治学第一回講義開始。西東先生ご自身がギターを弾き熱唱。井上陽水の『傘がない』。強烈な印象が今でも残っています。

一般の多くの人たちは、毎日の生活を送ることに精一杯で、安全保障や沖縄の基地問題など国政に関して思いを巡らせることはあってもそれらを突き詰めて考えたりする余裕などない状態に置かれているのが実情だと思います。

この歌は、そのことを的確に表わしていると思います。そして、西東先生の講義にかける思いが熱いエネルギーとなって私に伝わってきました。

後期で強く印象に残った講義は『米国黒人問題史（公民権運動に至るまで）』でした。リンカーン大統領による「奴隷解放宣言」から、キング牧師等の力で「公民権法」を成立させるまで百年もかかったことを映像も交えての講義でした。差別問題の解決の難しさを強く感じました。

日本では差別問題はどうでしょうか。私の体験ですが、昭和30年前後だったと思いますが、私の村の外れに朝鮮の人たちが住んでいました。村人の中には彼らを蔑視した呼び方をする人がいました。それは彼らのいない所で雑談の中で話すようなものでした。

しかし最近のヘイトスピーチの深刻さは、京都在住の知人から聞いたことがあります。

調査研究をしたわけでもないので感覚的になりますが、在日韓国・朝鮮人に対しての差別的言動は昔よりひどくなっているように思われます。

なぜ今のような状況になったのか、解決の道筋はあるのか等々、歴史的背景など調べてみたいと思っています。

文学部・社会福祉学部合同就職セミナー報告

就職課

ここ二・三年、学生を取り巻く就職環境は、猫の目のようにめぐまるしく変化し、各大学および企業を含めて対応に苦慮しているのが現状である。このような中、平成二十七年度は、就職選考開始が四月から八月に移行したため、文学部・社会福祉学部合同の就職セミナーを仮に五月上旬に実施した。

しかし、現三年生は、経団連等が、学事日程への配慮から就職選考開始時期を八月から六月に繰り上げることを決定したため、これに対応するため当初計画になかった今年度二回目の就職セミナーを三月二日に本学体育館で実施した。

今回はこれまでと異なり、福祉施設については採用時期が比較的遅いため、一般企業のみに絞った就職セミナーとした。

参加した企業は三十七事業所・一就職支援業者で、かつ学生は二・三年生含めて一〇〇名であった。

セミナー自体は、各ブースとも学生が企業の説明に熱心に聞き入り、質問を介して企業の求める人材や仕事内容などの理解を深めていた。

なお、実施後の学生のアンケート結果からは、目指す事業所の情報が得られ、求める人材がどういうものかなどが分かり、就職意欲の向上に繋がったと回答した学生の割合が多かった。

一方事業所業側の学生の印象としては、明るくて、素直で、好奇心があり誠実な学生が多いと回答している。また、二年生の参加者数の多さと企業研究の熱心さを感じたとのコメントもあった。以上から総じて学生達が好評価を頂いたものと自負している。

今回実施した就職セミナーは、三年生にとっては、就職スタートへの幕開けであり、今後の就職内定に向けての大きな足がかりとなる重要な行事である。二年生は、一年後に控えた就職に対する心構えや企業側の望む人物像を知り、今後の学生生活をいかに送ればよいか知る機会となったものと思う。

就職に関しては、有効求人倍率の向上に伴い、平成二十八年度も学生が有利に就職戦線を展開するものと思われるが、最終的には入社出来る企業は一社であることを忘れず、それを勝ち得るには自己を律し、最後まで諦めず挑戦する心を持ち続けて目的を達成して欲しい。今回の就職セミナーがその一助になることを期して報告とする。

社会福祉士・精神保健福祉士養成校成績優秀者表彰される

この度、二〇一五（平成二十七）年度の成績優秀者が決まり、三月十九日に表彰状の授与が卒業式後に行われた。

この賞は、学業成績・人物ともに優秀で、社会福祉士・精神保健福祉士養成校の養成課程修了者に対し贈られるものです。

日本社会福祉士養成校協会成績優秀表彰者は、山内涼平さん、日本精神保健福祉士養成校協会成績優秀表彰者は、山川美咲さんです。

2015年度　理事長賞授与者

文学部　英　語・英米文学科　古川ありさ（黒石高校卒）
日本語・日本文学科　菅野　亘（東奥義塾高校卒）
社会福祉学部・社会福祉学科　三上佑佳子（弘前中央高校卒）
看護学部・看護学科　滝吉華菜子（五所川原第一高校卒）

自分を成長させたこと

文学部　英語・英米文学科卒　古川ありさ

弘前学院大学での４年間を振り返りとても充実した学生生活を送ることができました。１年の頃は何もわからず、全てが初めてで緊張や不安でいっぱいでしたが、リトリートや学祭などのイベントに参加することで仲間の大切さを実感し、忘れられない充実した日々となりました。

私が大学生活で最も忘れられないのは３年生の時に海外研修に行ったことです。以前から英語やアメリカ文化に興味があり、いつかはアメリカに行き自分の目で見て学んでみたいと思っていました。文化を学ぶと共に消極的な性格を少しでも直し、何事にも自ら挑戦していける性格になりたいとも思っていました。この研修は私にとって初めての海外であり、自分だけで県外に出ることも初めてのことでした。海外に行くために最初はパスポートの申請から始まり、航空チケットの予約や東京のアメリカ大使館へビザの申請、提携先であるウィスコンシン大学への書類提出や寮の申請など交通機関以外の準備もたくさんあり、何もかもが初めてで不安になり、途中から行きたくないと少し思った時期もありましたが、担当の先生や自分の両親の協力のおかげで行く準備を整えられました。両親や先生の協力は必要不可欠でしたが、全ての準備を自分の力でやるので準備期間の段階で積極性や自ら行動を起こす力を身に着けることができました。

ウィスコンシン大学にはほぼ日本人の学生がいないので頼れる日本人はおらず、全て英語で聞かなければいけないため今までの様に消極的なままではいけないと、さらに積極的になることができました。私は流暢ではないので最初は聞きたいことも聞けませんでしたが、授業内で中国やブラジルなど違う国の生徒と接する上で彼らの、間違いを恐れず自分の意見を積極的に話す姿に刺激を受けました。実際に海外研修に参加できたからこそこのように色々な国から来た学生達と交流を深めることができたと思います。たくさん刺激を受け一番自分が成長することができた体験だと思います。海外に行けたのは両親や先生の協力があったからこそで、とても感謝しています。ありがとうございました。

学生生活を振り返って

文学部　日本語・日本文学科卒　菅野　亘

二〇一六年三月十九日に、私は四年間過ごしたこの大学を後にする。振り返ると、この弘前学院大学での四年間は、長く深い仙窟に迷い込む、一抹の夢のようであった。リトリートでの新たな出会い。仲間と力を合わせたスポーツ大会や学園祭。蝋燭の仄かな明かりの下、神秘と畏怖を実感したクリスマス礼拝の説教。卓上の理解に無力と悔しさを感じながらもやり遂げた実習。コーヒーを傍らに資料を散らかし、焦燥や不安と鎬を削った卒業論文執筆の長い夜。それらは、私の記憶に強く留まり、つい先程の事のように思われる。

この学生生活は、私にとって良い出会いに恵まれたひと時であった。入学して間もないころの私は、新たな学びへの期待と好奇心を抱く一方で、これまでの小さな社会や視野の中打ちひしがれ、自らの主張もままならない少年であった。しかし、そんな中、お互いに認め合う友人たちとの出会いが、そうした私を徐々に勇気づけてくれた。彼らと共に学び、競い、談笑したことは忘れられない思い出である。そして、何より、先生方との出会が私に大きな影響を与えてくれた。先生方は時に優しく、時に厳しく導く一方で、私の述べる考えを、いつも真摯に聞いてくれた。それが私の自信となり、勉学の励みとなった。また、先生方の研究に励む姿勢は、今も私に「学び」の指針を示しており、尚一層の励みとなっている。そして、いつも大学生活を支えてくれた職員の方々、温かく見守ってくれた家族。こうした出会いを経て今、以前の不甲斐ない少年がこうして卒業の日を迎えようとしている。それは、偏にこうした人々の薫陶と支えの他にはないだろう。私はこの弘前学院大学で出会ったすべての人々に心から感謝している。

四月から私たちはそれぞれの道を歩んでゆく。困難もあるだろう。しかし、そうであっても私は、この伝統ある弘前学院大学を母校と呼べることを誇りとし、また、そこでの出会いと学びを糧に、夢や目標に向かって精進してゆきたい。

祝卒業

4年間の学びを振り返って

看護学部　看護学科卒　滝吉華菜子

私は、この4年間でたくさんの人と出会い、経験し、学ぶことができました。思い返してみると、1年生の頃、人体の機能・構造など看護の基礎的な課題が山積みで、正直、勉強についていけるのか不安に思ったことが何回もありましたが、友達と一緒に勉強し、それを乗り越えたことを懐かしく思います。

3年生の後期になると本格的に実習が始まり、様々な患者さんを受け持たせていただきました。たとえ同じ疾患の患者さんであっても、1人1人に合わせた個別性のある看護計画を立て、ケアを実施することや、会話が難しい患者さんは、表情などから訴えを読み取る非言語的コミュニケーションを通して、安全・安楽なケアにつなげていくことが必要であることなどを学ぶことができました。また実習を通して、看護師にとって必要な能力の中でも、特に観察力や応用力が大切であると思いました。実習で看護師を見ていると、どんなに忙しくても患者さんの表情・しぐさなどの僅かな変化に気付いたり、急変時に焦らず柔軟に対応したり、とても刺激を受けました。私はこれから臨床での経験を積み重ね、患者さんの僅かな変化にも気づき、柔軟な考え方で対応できるように日々努力していきたいと思います。同時に、患者さんは病院が生活の場であり、疾患の症状などで悩みや不安を抱いている時は傾聴し、常に患者さんのことを考え、寄り添った看護を提供したいと思います。

最後に、受け持たせていただいた患者さんやそのご家族、ご指導して下さった看護師の皆さん、課題や実習を一緒に乗り越え、一緒に笑い、時に涙した友達、実習で戸惑った時に優しく声をかけてくださった先生方、そして、看護師になりたいと思ったきっかけを与えてくれた家族がいたから今の自分がいます。4年間支えてくださりありがとうございました。大学生活で学んだことを忘れず、日々精進していきたいです。

あふれる感謝

社会福祉学部
社会福祉学科卒　三上佑佳子

自分の4年間を振り返ってみると、本当に色々なことがあったなぁと懐かしく思います。

1年生の時はとにかく大学生活に慣れていくことに必死でした。毎日が不安と期待が入り混じった不思議な気持ちだったことを覚えています。吹奏楽サークルには即入部。ミスターラージ（知的発達障害勉強会）にも所属し、夏、冬に行っている短期訓練では、プログラムの準備や障がい児とのかかわりを通して自分と向き合うことができました。

2年生になり、専門的な講義が増え、福祉に対する気持ちも増していきました。そして1年だけではありましたが、弘学福祉創造フォーラムの一員としても活動しました。自分は何をしたいのかを考え直すと共に、先輩方の行動力や考え方に触れ、先輩方の偉大さを感じました。

3年生では初めての実習があり、実習初日は緊張のし過ぎで半泣きになりながら実習先へ向かったことを覚えています。これは4年生での実習でも変わりませんでした。実習では、毎日が新鮮で、今まで学んできたこととすり合わせをしながら、新たな知識を得ることができました。自分の知識の少なさや勉強不足を痛感し、このままではいけないと実習の度に喝を入れ直しました。

福祉について学び、実習を行ってきた中で、何度も「自分はこの道に向いているのだろうか」と考えて落ち込むことがありました。そんなとき、支えとなり励ましてくれたのは、共に福祉を学び、実習を乗り越えてきた仲間でした。私の話を聴いてくれ、寄り添ってくれました。「自分は福祉の分野でこんなことがしたい」、「実習でこう思った」等の話をし合うことで、福祉に関する意欲を高めていくことができました。

学部・サークルともに素敵な仲間に恵まれ、学び多き大学生活を送ることができました。悩み迷っている時に様々な助言をしてくださった先生方、楽しいことも苦しいことも共に乗り越えてきた仲間に感謝の気持ちでいっぱいです。

4年間かかわってくださった全ての方に……本当にありがとうございました。

「傍らの幸せ」

大学院社会福祉学研究科修了　辻　綾乃

二年前の四月は雪が降り、とても寒く、不安でした。それをつい最近のように思い出します。その頃に投稿させて頂いた時報には、どんなに困難なときも希望をあたためることが大切だ、と書きました。今思うと私の心情がそのまま反映されていたようです。

しかし、弘前学院大学の諸先生、職員皆さまがどんなときも熱心に話しを聴き指導してくださいました。いつでも快く受け入れてくださいました。

いま偶然手にした本の中の「傍にいること」という項には、「望みを持って、ずっと傍にいることが大事だ」と河合隼雄先生が仰っています。相手が困難を感じている時、支援する側の人たちは「もうあかん」と思うのではなく、望みを持ち続けることが大事なんだ、ということだそうです。なるほど、このような心遣いを私にしてくださった方々がたくさん居たんだなと、この小文を書きながら、ひたすら感慨深いおもいに浸っています。

わたくしが二年前に希望をあたためたいと記したことを回想しながら、二年間という歳月の間に、なにかとご指導・鞭撻いただいたことに感謝の念が尽きません。わたしの修士論文はいったいどうなるのかなと不安に思っていましたが、石田先生の懇切なご指導を受け、どうにか書き上げることができました。この貴重な経験を終生忘れずにいたいと思います。紙上をおかりし、あらためて諸先生に心からの感謝とお礼を申し上げます。